

リタイア後に
憧れる生活は…

最

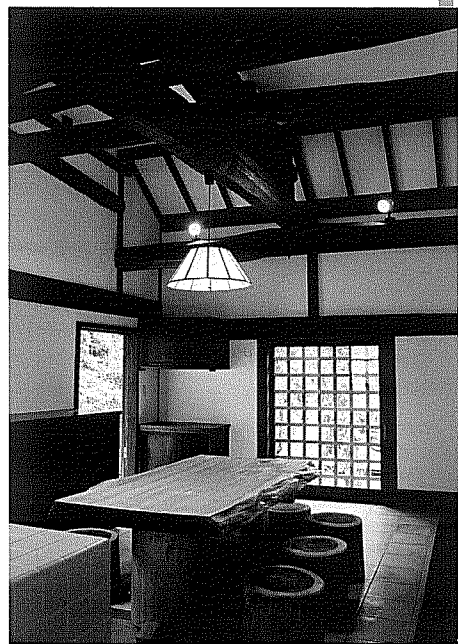
近、リタイアメントプランが盛んになってきた。信託銀行をはじめ、生命

保険会社や銀行などでも、リタイアメントプランを前提にした金融商品の売込みが激しい。

FP・FAとして、リタイアメントプランの相談を受けた際には、金融資産を増やすことばかりに腐心するのではなく、新しい生き方を提案するのも大切な役割である。

特に、老後の住まいへの提案として、どこにどのように住むかということは重要なテーマだ。

退職者の2人に1人は、現在の住居について、住替えやリフォームなどを検討して、実際に実行しているという。住み替える理由としては、加齢や自宅の老朽化が最も多く、次いで、子の独立やライフスタイルの変化となっている。リタイア後の夫婦の夢も、一気に膨らんでくる。



▲古民家を移築再生した木造空間
(提供)日本民家再生リサイクル協会

都市郊外の一戸建てを売却して都心のタワーマンションに移る、いわゆる「都心回帰」の生活もあれば、田舎暮らしに憧れて、田舎の土地を購入するケースもある。

リタイア後に家庭菜園などをして日々暮らすという生き方もあるが、田舎に土地を購入して、古民家を移築再生して本格的な田舎暮らしをする人も多く出てきている。あるいは、現役時代に海外勤務が長く、リタイア後も海外にロングステイしたいと願う夫婦もいるだろう。

では、最初から都心に住んでいる人々はどのようにしているか。それは街中を見てみると簡単に答えが出てくる。

3階建てのマンションなどに建て替えて、それなりの土地活用をしているのが大半であることが分かる。

そ

んな都心の路地裏を散歩して、ふと大通りに出たとき、ちよつとした発見があった。3〜5階建てのビルに挟まれるように佇む古い木造の民家を見つけたのだ。

大通りに面しているという

立地のため、もともと商店であったのだろう。昭和初期の木造建築と思われるが、木製の外壁が剥がれ、隙間から木舞の壁がのぞいている。窓枠、窓の手すりも木製であり、「寅さん」映画のシーンにあるような風情でもある。

ふと思うのは、「この住民はいったいどんなライフスタイルなのだろうか」ということ。

都心での古民家の生活も、リタイアメントプランを立てるうえで、憧れのひとつとなることは、確かなようだ。



えりぐち・きちお

1950年東京生まれ。大学卒業後インドを放浪し、ヒッピーとなる。帰国後、ミニコミ新聞社を経てミサワホームに勤務。2000年にFPとして独立。相続FPの提唱者でもある。相続FP研究会理事、相続支援ネット代表。